

「原爆言説」と「戦後文化運動」

の接点をさぐる

茶園 梨加

研究会二日目、思いがけなく『原爆の図』と「再会」した。岡村幸宣氏の報告で、丸木位里、俊の『原爆の図』がスクリーンに映された。絵に観入るうちに、個人的なある記憶が蘇る。小学校一年生のときに、学校の図書室で一冊の本ばかりよく借りて読んでいたこと。丸木俊『ひろしまのピカ』である。何度も借りて家に持つて帰り、時には休み時間でも図書室へ観に行つた。数年後、小峰書店から出版されている『原爆の図』と別の図書館で出逢う。他の多くの本があるなかで、なぜ「原爆」の悲惨さを表現しているその本でなければいけなかつたのか。決して、子どもが好む可愛らしいタッチの絵ではない。確かに『ひろしまのピカ』の主人公は七歳の少女であり、私がその本を何度も観ていたとき、読者の私が六歳の少女であつたことは大きな理由かもしれないなかつた。だが、私にはそれ以上に丸木の絵から表出される恐怖、それでいて美しい描写を今でも思い浮かべるのである。あの有名な『原爆の図』が、戦後文化運動の問題領域のなかで語られるということは、思つてもみないことであつた。

「原爆」は、戦後文化運動において、大きなトピックスである。一九五〇年代の炭鉱労働者による機関紙・誌を読んでいると、「原爆」を前提とした反戦、平和運動の記述と頻繁に出逢う。朝鮮戦争、第五福竜丸事件、そして安保闘争へと続くように、一九五〇年代には「原爆」が文化運動のなかで頻繁に語られていた。それが文学として表現されるとき、どのような問題が新たに立ちあがつてくるのだろうか。疑問を抱きながら、研究会に参加した。

一日目は、まず水島裕雅氏が「峠三吉と「われらの詩の会」」と題し報告を行つた。掲載された全作品をいくつかのキーワードで分類すると、そのなかで、「原爆」と「反戦」が群を抜いて多い素材であったという数値データは興味深い。また、栗原貞子夫妻が参加した「中国文化連盟」についても触れ、「われらの詩の会」との相異を指摘した。コメント担当者であった宇野田尚哉氏は、雑誌が国際派、主流派の指導下での闘争を経て続いている点を指摘し、さらにブランゲ文庫の資料との組み合わせで考察することなどが今後資料を読み解くうえでの方法だと述べた。

全体討議では、書き手の男女の比率の問題や、「中国文化連盟」と大政翼賛会との繋がり、国際派／主流派の分裂との呼応の問題、直接的な長崎との直接的な繋がりが皆無であること、などが挙げられた。書影などがあればもつと資料の手触りが伝わつたのではないかとも感じた。復刻が待ち遠しい資料である。

二つ目の報告は、竹内栄美子氏による「山代巴の文学／運動」である。竹内氏は、山代には「女性／農村／原爆」という三つのテーマがあり、各々が別個にあるのではなく、人権問題、平等思想、平和運動としての文学／運動に、「女性」がクロスする構造

であることが指摘された。そして、「人民文学」に連載された松田解子との往復書簡「日本の女」を辿りながら、論点を明らかにする。一方で原爆被害者援護活動を行いながら、他方では農村女性たちの解放運動を行っていた強靭さと思考の柔軟さを改めて感じた。このように望遠鏡と顕微鏡を同時にもつような山代の思考は、上野英信や森崎和江にも見られる。古い共同体を基盤として「集団的意志」を形成したことは筑豊における「サークル村」や「無名通信」と近いものがある。松本麻里氏の「個人の解放」と「類としての女性」の解放を同時にめざす立場の困難さそのものを山代が体現しているのではないか、という指摘には同感である。

先に挙げた、望遠鏡と顕微鏡両方の視点を、個人と集団の問題においても実践していたのではないかとも思われる。個を打ち消さないかたちでの集団としての主体形成を考えると、では森崎和江はどうだったか、石牟礼道子はどうだったか、と問い合わせたい。そして改めて彼女らの文章に触ることで、各々の問題提起の違いを考えたい。

一日目最後の報告は、楠田剛士氏による「山田かんとサークル誌」であった。今回の研究会において唯一、長崎をフィールドとした報告である。山田かんや他の同人の作品を紹介したうえで、ながさき芽たち文学サークルが労働者による原爆表現の場であつたと活動を捉えた。また先行研究をもとに山田かんながさき芽たち文学サークルの活動を追つた年表を提示した。この年表に、長崎生活をつづる会や佐世保のサークル運動の情報などを加えていけば、今まで見えてこなかつた一九五〇年代の長崎における文化運動が明らかとなるかと思う。コメントは坂口博氏が行ない、

山田が基地としての佐世保について述べている七三年の言説をもとに、長崎と佐世保という二点における文化運動の繋がりと分断について問題提起をする。北部九州の様々な文化新聞について紹介し、プラネグ文庫に収録されているそれらの調査の重要性を指摘した。

私自身が興味を持ったのは、交流雑誌である。「芽だち」誌面上にみられる交流誌には福岡人民文学サークル「海峡」や、熊本文学会「熊本文学」、大牟田市の炭鉱地帶文学会の名がみられる。「海峡」は、「人民文学」誌上でよく目にのするサークル名であり、「熊本文学」との交流も深いという記述を目にしたことがある。そのような「人民文学」系のネットワークを考えると同時に、「サークル村」に参加することのなかつた大牟田のサークル名が見られること、そしてその一方で「地下戦線」や「炭礦長屋」など「サークル村」に結びつくサークル誌名が出てこない点は今後考察すべきかと思う。もちろん、この問題は九州内だけではない。同じ「原爆」という問題を抱えながらも、崎三吉や山代巴の活動と、長崎市の文化運動が直接的に結びついていないという問題にも関わる。

今回の研究会は、「広島／ヒロシマ」をめぐる文化運動再考」というテーマのもと開催され、その大半が「広島」を中心に語られた。長崎・原爆の言説が語られる比重が低かつたことは、当然といえば当然である。しかし、これが、例えば長崎・原爆を中心と論じる会であつたとしても、果たして「長崎／ナガサキ」をめぐる文化運動再考」というタイトルで、これほどの議論が成り立つだろうか。その理由として、戦後長崎における文化運動の厚

み（の忘却）、いや文化運動「研究」の厚みが無いことが考えられる。一方で、同じ「広島」外の報告として、二日目の道場親信氏による報告「原爆を許すまじ」と東京南部—50年代サークル運動の大衆化と極大化のシーンーがある。道場氏の丹念な調査により、東京南部で創られた「原爆を許すまじ」が、作詩作曲運動やうたごえ運動のなかで広がりをもつにいたった過程が可視化された。文化運動の問題領域で考えた場合に、広島と長崎よりも、広島と東京南部のほうが近しいというのは、今からすれば不思議なことである。山田かんを中心とした文化運動が改めて整理された今、長崎における文学以外の、例えはうたごえ運動などの動きがどのように他の地域と連関していたのか、いなかつたのか、今後調査研究を行う必要がある。そのとき、今回は明らかとはならなかつた、広島・東京南部・長崎の三地域を通してみる視点が、初めて可能となるだろう。

冒頭で触れたが、二日目には、絵画と文化運動の問題も議論された。小沢節子氏は「体験者の表現と運動のあいだー丸木スマ、大道あやの「絵画世界」を中心にしてーと題して、スマやあやの作品が、個々の体験を描きながら、どのように共通する経験を自分のなかでひきうけ、また、どのように表現していくのか、に注目することの意義を指摘した。また、岡村幸宣氏「原爆の図」全国巡回展の軌跡によれば、丸木位里、俊は、「原爆の図」巡回展での観覧者との交流と彼らの反応から、作品を反省し、次の作品の創作へと効果的に昇華させたという。

そもそも「原爆」言説は、個々の体験が、他の多くのものの記憶に繋がるという要素をもつていて。「原爆」というトピックス

が、戦後文化運動を論じる際に私たちに有意義な議論を提示するのは、そのような要素が、集団を主体とする文化運動の在り方を再考させるからである。例えば上野英信がいた福岡県遠賀郡水巻町の日炭高松労組の機関誌「地下戦線」では、職場の体験を書くことで、同じく炭鉱で働くものたちと経験を共有し団結しようと呼びかけられていた。同誌は、「任侠の河は甦える」という全三幕の戯曲を集団創作する試みも行なつた。また、「サークル村」では、共同創作の実践として森崎和江の書き書き「スラをひく女たち」が連載された。こういつた戦後文化運動の「集団」を発言の磁場とし、主体とした在り方は、まさに記憶を共有化していく「原爆」言説の構造と類似し、だからこそ、「原爆」言説を考えるうえで戦後文化運動は等閑にできないし、逆もまたそうなのである。

一方で、一九五〇年代を考えたときに、一九五〇年代前半の、「原爆」言説・文化運動と、五〇年代後半の「サークル村」の活動がどう異なつていたのか、厳密に考える必要もある。そういう意味において、道場親信氏が指摘したように、五五年をピークとして、それ以降衰退するサークル運動の流れがあるなかで、五八年創刊の「サークル村」がどのように問題をひきうけていたのかという問題とも繋がる。

「サークル村」 자체の活動ではないが、例えは先に挙げた日炭高松労組や青年婦人会が発行していた機関紙では、一九五九年八月六日に広島市において開催された第五回原水爆禁止世界大会に参加するため、遠くは奄美諸島から各県の代表者が幅広く参加し、広島をめざして五千キロを歩く平和大行進が行われたことを記し

ている。機関紙に記事が掲載された理由として、同年七月二十日に行進が水巻町を通過したことがある。「特に沖縄よりの代表者は監視と圧迫をさけ、脱出して参加した」⁽¹⁾こともあつたようである。「平和大行進の一隊は、大正労組“なかづる”号に先導されて行進」し同日十二時十分に水巻町に入る。「打揚げ花火が空につんざき、五色のテープが、紙吹雪が舞」つた。「原爆許すまじの歌声にはじまつた歓迎大集会」が催され、一時三十分ふたたび出発。「数百名の集団にふくれあがつた国民平和大行進は、次の目的地、八幡をめざして、楽団先導のもとに水巻の町を去つて行く」⁽²⁾。九州の一炭鉱町であつても、この大行進が一大イベントとして捉えられていたことが分かる。

このような資料は、きっと他の地域でも多々存在するに違いない。「原爆」をめぐる文化運動を考えるときの、広島・東京南部・長崎の関係とともに、その他の地域ではどのように問題が共有化されていたのか、その裾野がどこまで広がるのか検討することも今後の課題であるだろう。

1 注

「五朋」発行所・日炭高松第五支部青年婦人会、発行人・西岡涉、

編集責任者・坂本昇（一九五九年七月二十日発行）より引用。「（略）地元の政治団体、民主団体、労組員が多数行進に合流、プラスバンドを先頭に赤旗の林、平和大行進の横幕、原水爆反対、核兵器反対等のプラカードをかゝげ、（略）組合本部前では先頭が到着すれば歓迎の花火と色とりどりのテープの嵐、花吹雪で広場は感激の坩埚と化した。」と当日の様子が綴られている。この国民平和大行進は、一九五八年に始まり、現在も行われている。

2 「さいたん」二二号（日炭高松労組第二支部採炭協議会機関紙、発行・大石溢美 責任・馬場春一、一九五九年七月三十日発行）掲載の「ヒロシマえ広島え！国民平和大行進！」水巻町を通過（本部前で歓迎大集会）による。そのほか、管見のかぎりでは「支部だより」一号（高松労組第一支部機関紙、発行者・第一支部執行部、一九五九年七月十八日発行）掲載の「国民平和大行進・県道通過！」などの記事がある。

※ 本研究会批評は、「原爆文学研究会報」第28号掲載の「合同研究会印象記（八月二九日午後）」に加筆・訂正したものである。また、必ずしも全報告・コメントに触れたものではない。ご了承願いたい。